

メディアとしての卒業アルバム

——ヒラリバー日系アメリカ人収容所における高校生活の表象分析——

和泉真澄

英文要約

This paper analyzes high school yearbooks created by Japanese American students incarcerated in the Gila River War Relocation Center (concentration camp) in Arizona during World War II. The class photographs and snapshots of school activities give the impression that the incarcerated youths spent school lives similar to ordinary American students. Racial hierarchy was fixed through the representations of administrators and senior faculty members being all white, while all junior faculty and students being Japanese Americans. Portrayals of active female students implied relatively equal gender relations among Nisei. Nisei's patriotic dedication as soldiers serving for the US Army was portrayed vividly in cartoons. The emphasis on Nisei's patriotism and the complete absence of ethnic cultural elements not only reflected the WRA policy which envisioned camp schools as an institution for Nisei's Americanization, but suggested that these albums were designed as representational media to the outside world. Self-censorship was a survival strategy adopted by a community incarcerated as "enemies," which aspired to be accepted as "ordinary Americans."

キーワード：日系アメリカ人強制収容，卒業アルバム，表象分析，アメリカ化

I 序

フットボール練習開始の発表に応じて集まったビュート高校の少年たちは，このアメリカ人にもっとも好まれるスポーツにかかる熱意と愛情で満ち満ちていた。装備も不足し，グラウンドの整備もフィールドの線引きもまだであったため，練習はなかなか始まらなかった。ようやく装備が到着し，フィールドが使えるようになって，ついにフットボールができるようになった。ベルコーチによる稽古の呼びかけに応え，35名の志願者たちが集まった。

ビュート高校卒業アルバム『Year's Flight』(1943)より

カリフォルニアの美しいキャンパスを追われ，急ごしらえの建物に囲まれた，灼熱で砂まみれのキャンプに移動しても，ティーンエイジャーはやはりティーンエイジャーだった。アリゾナ州南部に建設されたヒラリバー日系人戦時転住所では，1942年7月下旬の開所から3ヶ月を待たずして，幼稚園から高等学校までが開かれた。収容所の学校は，専用の建物もなく，教室，

図書室、運動場、体育館といった施設はもちろん、学習用机や椅子、教科書など、全てが不足していた。白人教員の動員が間に合わず、当時の平均年齢が17歳であった二世の間にも、教員の資格を満たす者は少なかった¹⁾。開校したばかりの月は、生徒たちは「床や箱、釘入れの樽、壁に打ち付けられた棚受けに板を置いただけの簡素なベンチに座り」、授業を受けた²⁾。1月末まで暖房は入らず、夏にも水蒸気クーラーは十分に行き渡らなかった³⁾。それでも、生徒たちは勉学に励み、スポーツや生徒会、コミュニティ活動に精を出した。親たちは子どもの勉強を遅らせまいと、学校を献身的に支えた。

因われの身にあつて、子どもが平穏な学校生活を送れる環境を整えることは、親たちにとって、子どもが「外の世界との適切な情緒的關係を築く」ために必要不可欠なことだった⁴⁾。敵国日本を父祖の土地とするというだけで、何の罪もないまま敵性人種として収容所に監禁されているという事実を、自由と民主主義、正義の国アメリカの立派な市民となるよう子どもを教育するなかで、どのように彼らに納得させるのか。この矛盾は、収容政策を司った戦時転住局 (War Relocation Authority: WRA) のトップから、収容所を管理する現場の白人公務員、そして被収容者にいたるまで、極めて厄介な問題だった。児童生徒にとっては、人格形成期における根本的な社会秩序の崩壊と混乱は、生涯にわたり負の影響をもたらしかねない深刻な事態だった。学校生活を子どもたちがいかに「正常」に近い形で送れるか、また「異常」な学生生活をどのように表象し、記憶するかは、日系人にとってはもちろん、主流社会に対する政策の正当化と広報 (パブリック・リレーションズ) の任を負う WRA にとっても極めて重要だった。

本稿は、太平洋戦争中のアメリカで10ヶ所に設けられた WRA 戦時転住所のうちの一つ、アリゾナ州ヒラリバー収容所のハイスクール卒業アルバムに描かれる高校生活の表象分析より、卒業アルバムが被収容者と主流社会をつなぐ表象媒体 (メディア) として果たした役割を考察する⁵⁾。収容所を表象するメディアとしては、これまで収容所新聞や写真などが多くの研究者によって分析されてきており、日系人自身の体験や感情・思考を綴った収容所文学についても、かなり研究の蓄積がある⁶⁾。また、収容所の学校や教育についても一定の先行研究が存在する⁷⁾。そこで本稿では、これまで収容所メディアとしてはほとんど取り上げられなかった卒業アルバムを研究材料とし、自発的・論理的な自己表象が可能な、そして二世の年齢のほぼ中間値にあたる、ハイスクール卒業年度の日系二世が描いた収容所生活を分析することにより、収容所から発する日系人の自己表象の特徴、彼らの表象にアメリカ政府が加えた制約、そしてエスニック社会から主流社会へ出て行く結節点での日系人イメージの構築の過程を考察することとする。卒業アルバムは収容所教育の表象媒体として、収容所の外、すなわち主流社会に向けてのメッセージと、収容所教育の当事者、すなわち生徒たちの自己表象と記憶の可視化という二重の機能を担っている点で、戦中の「ジャパニーズ・アメリカン」の表象としてユニークな役割を果たしており、その詳細な表象分析は、政策に含まれた矛盾や被抑圧者の戦略を浮き彫りにすることができる。

なお本稿は、ヒラリバー収容所のアルバムを分析の中心とするという意味で、事例研究であることを断っておきたい。ヒラリバーにサンプルを絞るのは、アルバムに含まれるさまざまな要素をよりきめ細かく分析するためであると同時に、同収容所が WRA 戦時転住所のなかでもっとも問題の少なかった収容所だったためである。ヒラリバーでは、目立った暴動や騒動がなく、

忠誠質問に「イエス」と答えた入所者の割合は90.5%、また徴兵忌避者を1人も出さなかった⁸⁾。もちろんこのことは、ヒラリバーが日系人強制収容政策の抱える根本的矛盾を内包していなかったことを意味しない。しかし、人種差別的排除とエスニック・マイノリティのアメリカ社会への同化と包摂という、両義性を帯びた日系人強制収容政策の媒体の一つとして卒業アルバムを考えるとすると、表象を通じた日系二世の「アメリカ化」におけるメディアの役割をもっとも典型的に表すのは、収容所の管理者にとって「理想的な」収容所であったヒラリバーのサンプルであるとも言えるのだ。以上のことから、本稿ではヒラリバーの卒業アルバムを中心に扱うが、今後、比較のために他の収容所のアルバム分析を行う必要があることは言うまでもない⁹⁾。

Ⅱ 日系人収容所における学校教育

1. 集結センターから WRA 戦時転住所へ

太平洋戦争勃発後、フランクリン・D・ローズベルト大統領が発令した行政命令第9066号にもとづき、アメリカ陸軍は日本人を人種的祖先とする者全員に太平洋岸100マイル「防衛地域」から立ち退くよう命令を出した。西海岸に住んでいた約4万人の日系一世と7万人超の二世、三世は、まずは防衛地域内の競馬場や博覧会場に作られた「集結センター（仮収容所）」に住まわされた¹⁰⁾。競馬場などを利用した集結センターは、衛生環境も悪く、寝具も粗末で、プライバシーもまったくなかった¹¹⁾。しかし、教育熱心な日系人はセンター到着まもなく、幼稚園や英語クラス、そして学齢期児童のための学校を自主的に組織した¹²⁾。

集結センターからより長期の収容が可能な戦時転住所に移動すると、日系人たちはやはり学校作りに取り掛かった。しかし、収容所の教育からは日系人の自主性が排除され、より政府の意図を色濃く反映するものとなった。日本語使用は禁止され、学習はすべて英語で行うよう命じられた¹³⁾。WRAはアメリカ先住民に対する教育政策を参考に、教科学習よりも社会への統合を容易にするための職業訓練を重視する、コミュニティ・スクールの導入を決定した¹⁴⁾。立ち退き開始からの日系人の努力や教育成果に関わらず、政府は二世を白人教師の監督の下で働く助手や見習いという立場に固定した¹⁵⁾。収容所学校では、日系児童を立派なアメリカ市民へと養成すること、ならびに二世のアメリカ社会への復帰・統合が最大の目標とされた。このような制約のなか、日系人は教育環境を最大限に整えようと努力することとなった。

2. ヒラリバー戦時転住所

当初日系人の最大の収容先となったのは、アリゾナ州北部に建設されたコロラドリバー（ボストン）転住所（ピーク時人口17,814名）、およびアリゾナ州南部に建設されたヒラリバー転住所（ピーク時人口13,348名）であった¹⁶⁾。ヒラリバーでは、17,000エーカーの広大な敷地のなかに、カナル・キャンプとビュート・キャンプという二つのキャンプが作られた。ほとんどの入所者はカリフォルニア出身であったが、ビュート・キャンプが主に都市部と内陸部から移送された混合的な住民から成り立っていたのに対し、カナル・キャンプは内陸部農村地帯の出身者が多く割り振られた。

ヒラリバー収容所のバラックは、壁が白く、暑さ対策のために赤い二重屋根を備えていた。

また、周囲が砂漠で逃げられないため、監視塔は一つしかなく、またキャンプを囲む鉄条網も当初一部に設置されたが、やがて取りはずされ、他のキャンプと比べると多少なりとも通常のコミュニティにより近い外観を入所者に提供していた¹⁷⁾。

3. ヒラリバー収容所における学校教育

ヒラリバーの学校は物理的にコミュニティの中心にあった。カナル・キャンプでは中心部のブロック13にあった24棟のバラックが学校として使われた。ビュート・キャンプではブロック41とブロック43周辺の46棟が学校用とされた。初めはなかなか設備が整わなかったが、入所者たちの努力で学校の整備は徐々に進み、ビュートではやがてブロック43の北側に講堂、科学・家庭科・職業訓練用の建物、運動場が建設された¹⁸⁾。また、学校の施設ではないが、ヒラリバーのスポーツ施設はその後改善を重ね、やがては、6000人の観客席を備えた野球場まで作られた¹⁹⁾。

教育プログラムは、保育所から成人教育まで整えられた。1943年7月時点でのそれぞれの学校の生徒数と教員数は、以下の表のとおりである。

表1 各レベルの学校の生徒数、および教員数（1943年7月現在）

学校	生徒数	白人教員数	日系教員数
保育所、幼稚園	414	0	33
小学校	1,552	30	33
ハイスクール	1,893	40	40
成人教育	1,443	10	35

収容所開所一周年記念冊子『A Year at Gila』より²⁰⁾

表を見るとわかる通り、保育所と幼稚園、および成人教育には日系人教員が多く携わっているのに対し、小学校とハイスクールでは白人と日系人の割合はほぼ半々である。WRAは特に白人教員の獲得に困難をきたし、1クラスに40名から60名の生徒がいることも稀ではなかった²¹⁾。白人教員は離職率が高く、また二世も出所して多くが学校を離れていったことを考えると、学校は生徒たちにとって落ち着いて勉強するのが極めて難しい環境にあった²²⁾。しかし、ヒラリバーの公式記録を見る限り、教育の水準を当局が高く保とうと努力したことが読み取れる。白人教員の資格はアリゾナ州教育委員会の規定に則り、小学校は学士号取得以上、ハイスクールの場合は修士号取得以上とされた。日系人正教員は大学卒業、補助教員は大学への在籍経験が最低条件であったが、教職につきながら教員資格を取得できるよう、アリゾナ州立大学の教員養成課程の通信教育を受けられる制度が整えられた²³⁾。過酷な環境を考慮し、白人教員には通常の教員以上の給料が支給されたが、日系教員は入所者に共通に適用されていた給与体系、すなわち月16ドルの給料で雇われた²⁴⁾。

WRAのトップはコミュニティ・スクールを方針としていたが、ヒラリバーの現場では、教えられる教科はアリゾナ州のカリキュラムに準じるとされた。親たちは子どもへの立ち退きの負の影響を緩和するため、「立ち退き前の学校以上に良い学校を要求」した²⁵⁾。教員も「生徒の喪失感と不満を過剰保障しよう」と、学業の基準を高く設定した²⁶⁾。生徒たちも「膨大な宿題」に

不平を言いつつ、努力を重ねた²⁷⁾。最終報告書によれば、収容所での高校生の成績はアリゾナ州の平均的学校より高かった²⁸⁾。

戦争中の日系人は教育への熱意を失わなかった。ハイスクールでは、教科以外にスポーツやクラブなど、課外活動も盛んにおこなわれた。生徒会も組織され、学校新聞、卒業アルバムも、そのような活動のなかで実現した。PTAも最初の年度から組織された。一世にとって学校は、生活の秩序を失った二世に秩序と指針を取りもどさせる重要な機関であり、二世にとっては、出所し社会へ出ていくための基盤を形成する場所だった。

Ⅲ ヒラリバーのハイスクール卒業アルバム

ヒラリバー収容所には、カナル・ハイスクールとビュート・ハイスクールという二つのハイスクールがあった。カナル・ハイスクールでは『The Rivulet』というタイトルで1943年、1944年、1945年の卒業アルバムが作られた。ビュート・ハイスクールでは『Year's Flight』というタイトルで、同じく1943年から45年までの卒業アルバムが作られた。ワシントンDCのアメリカ国立公文書館には6冊のアルバムすべての原本が所蔵されている²⁹⁾。

ヒラリバーの卒業アルバム『The Rivulet』と『Year's Flight』は、いずれも表紙が革装あるいは布装で分厚い立派な作りをしている。当初、机も椅子も満足になかった収容所の学校で、半年後の1943年春にこのような立派な卒業アルバムが作られたことは、生徒や保護者だけでなく、収容所の人々全体が多大な協力を惜しまなかったことを示唆している。

アルバムは年度を問わず、基本的に同じ体裁で作られている。まず冒頭に、収容所教育の最高責任者であるカリキュラム・ディレクター、教育長、そして学校長の写真があり、彼らのメッセージが掲載されている。その後、教師の写真と名前が掲載され、主だった事務員なども顔と名前を連ねている。アルバムの主体は、各クラスの集合写真で、個人名を添えて、最終学年から最少学年まで載せられている。次に、クラブなどの課外活動、生徒会活動の写真などがあり、授業やスポーツなど、各種活動中のスナップ写真や説明が続く。最後には、アルバム作成委員の写真、そしてアルバム作成のためのスポンサーが列挙されている。アルバムには随所に、生徒による詩や短いエッセイ、コメントや挿絵などが施されており、読み物としてもなかなか優れている。まとめると、収容所学校のアルバムは、通常のハイスクール卒業アルバムと体裁・内容的に基本的には変わらない。

この、一見アメリカのどこのハイスクール卒業アルバムであってもおかしくない収容所学校のアルバムだが、学校が置かれていた困難な環境を考えると、これを作り出したこと自体が驚くべきことである。と同時に、収容所での出来事とアルバムの表象を批判的に読んでいくと、いくつか奇妙な点にも気づかざるを得ないのである。

1. 1943年度の卒業アルバム

(1) アルバム表象に見える人種関係

最初の卒業アルバムが作成されたのは43年の春であった³⁰⁾。初めに目を引くのは、収容所教育の管理者の写真である。全員白人男性で、温厚そうな顔のアップが1人につき1ページをフ

ルに使用して載せてある。教員のページには白人教員と日系教員の写真が混じって並べられているが、白人教師の多くが中年であるのに対し、日系教員は若い二世ばかりである。ここには、「温厚な庇護者」としてのリベラル白人男性の家父長的イメージが明確に表れており、日系教員があくまで白人教員の監督下で正教員または補助教員として教鞭をとっていたという、現実の収容所学校での権力関係を、そのまま視覚的に反映した表象となっている。



写真1 アルバムの表紙

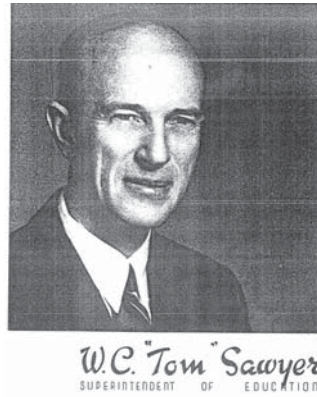


写真2 教育長

白人教員と日系教員の多くは、個人としては協力し合い、学校をともに良いものにしようと教務に励んだ。しかし、白人教員と日系教員の給料には10倍もの開きがあった。そして、白人教員にはいつでも収容所を去る自由があったが、日系人にはそれが許されなかった。日系人が収容所を出るには、政府による忠誠審査という踏み絵を踏まねばならなかった。本来ならば、出生による市民権は無条件に付与されるものであり、人種や思想・信条には関わらないはずだが、日系人に対して与えられた自由は、国家に対する忠誠心への報奨という性質を帯びていたのだ³¹⁾。

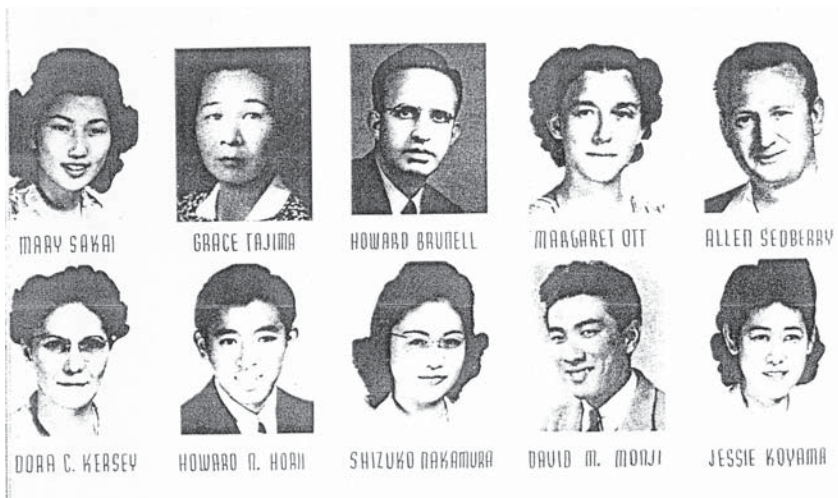


写真3 ビュート・ハイスクールの教員たち（一部）

クラス写真を見ると、生徒は当然ながら全員日系人である。このホモソーシャルなイメージもまた、戦中から戦後にわたる日系人の表象的構築に重要な影響を与えたと思われる。特に印象的なのは生徒たちの髪型である。男子はほぼ全員がリーゼント、女子はほぼ全員が前髪と後ろ髪を巻き毛にしている。

前述したように、ヒラリバーには、カリフォルニア内陸部の農村地帯から移送されてきた人たちと、ロサンゼルス近辺の都市部からきた人々が混ざっていた。戦前の日系人の職業の多様性を考えると、二世の服装や髪型にもある程度のバラエティがあったはずである。例えば、ジーン・ワカツキ・ヒューストンは自伝的小説『マンザナルよ さらば一強制収容された日系少女の心の記録』（現代史出版社、1975年）のなかで、日米開戦後、家族が一時的にターミナル・アイランドに移ったときの体験を綴っている。ロサンゼルス南のロングビーチの白人中心のコミュニティで育ったヒューストンは、住人の大多数が日系人であるターミナル・アイランドに引っ越して大いに戸惑う。特に幼いヒューストンを悩ませたのは、自らを「ヨゴレ」と呼ぶ漁師の若者の集団であった。ターミナル・アイランドの日系住民のほとんどは南紀州の漁村の出身であり、使う方言も立ち居振る舞いも、白人ミドルクラスの都市コミュニティで育ったヒューストンには、恐ろしく乱暴で粗野に思えたのだ。³²⁾ ロサンゼルスの日系人のエスニシティを研究した南川文里は、日系人は日系というエスニックなつながりよりも、日本の中の出身地とのトランスローカルなつながりにアイデンティティをより強く保持していたことを指摘しており、ロン・クラシゲもまた、日系人は仏教徒／キリスト教徒、農村住民／都市住民、日本語話者／英語話者、労働者階級／ミドルクラスなど、宗教的・社会的・経済的に大きな多様性を含んだ集団であり、決して文化的に一様なコミュニティではなかったことを強調している³³⁾。これに対し、強制収容を通過した後の日系人の表象は、それまでに帯びていた多様性を失い、極めて均質なイメージに包摂された。その理想形は、英語をベースとしたミドルクラスの良き市民、すなわち人種的マイノリティである点を除けば、すべての点で「アメリカ化」された人物のイメージである。

人種という点からもう一つ指摘しておきたいのは、卒業アルバムの表象には、管理者たる白人と被収容者たる日系人以外の民族が登場しないことである。ヒラリバー収容所は先住民居留地内に作られ、また極めて短期間で1万人以上を収容するキャンプを建設するには相当の労働力が必要であり、この地域の労働人口を考えると、ラティノの労働者がゼロであったとは考えにくい。また、ヒラリバーで「日系アメリカ人避難転住調査（JERS）」の調査員であったチャールズ・キクチは、日記のなかで、アフリカ系の労働者に言及している³⁴⁾。しかし、アルバムのイメージでは、登場する非日系人はすべてヨーロッパ系で支配者側の立場にあり、また日系人以外の人種的マイノリティは登場しない。人種と階級の権力構造から見た場合、白人労働者階級も、入所者に対して支配的立場にある人種的マイノリティも現実にはいたわけであるが、アルバム上では存在しないのだ。支配関係と人種関係を現実よりも単純化することで、アルバムの表象は、白人と日系人の階層的上下関係を絶対化し、さらにはあたかもそれが自然であるかのような錯覚を与えるのである。

(2) アルバム表象に見えるジェンダー・イメージ

前述したように、アルバムは白人官吏の姿が最初に大きく描かれ、その後、教員、生徒の写真という構成になっている。学生アドバイザーや二世の再定住支援スタッフとして、収容所学校では女性の職員も活躍した。教科教員にも多くの女性が含まれていた。



写真4 野球

アルバムには、教科の写真の他に、図書室や放課後の課外活動のスナップが豊富に掲載されている。特に大きく取り上げられているのはスポーツに関する情報である。なかでもとりわけ多くページを割いているのは、アメリカン・スポーツの御三家、フットボール、バスケットボール、そして野球である。フットボール、バスケットボール、野球のページには、イラスト、メンバーの写真と一緒に、それぞれの競技の試合結果などが載せられている。この三大競技にはそれぞれ2から3ページずつ割かれている。学校対抗の試合などに詳細な記述があるところを見ると、選手だけではなく、試合結果に学校全体からの関心も高かったことが伺える。三大スポーツで男子選手中心にマッチョな表象が行われることは、他の高校アルバムにもよく見られることだ³⁵⁾。

女子のスポーツにもまとめて2ページが割かれているが、女子の姿が目立つのはパレードの美人コンテスト、生徒会の役員などである。生徒会長は全てのアルバムで男子であったが、役員には女子の姿も多く見られる³⁶⁾。男子が生徒会長とマッチョなスポーツ、女子が図書室や美人コンテスト、生徒会の書記・会計などの役割で登場するという点で、アメリカの通常の高校卒業アルバムとよく似たジェンダー・イメージの役割分担が成立している。生徒会は女子と男子の代表が同数入っており、学校憲章委員会の写真には、白人男性教員の他、女子が三名、男子が三名写っている。アメリカン・コミュニティの建設を目指していたWRAにとっては、二世が生徒会やその他の委員会を盛り上げ、女子も積極的に参加し貢献することは、アメリカ的民主主義の理想的具現化であった。アルバムのなかに活動的ではつつとした二世女性像が多く見られることは、男女間の年齢差が大きく、より伝統的家父長主義的關係にあった日系一世た

ちとは、明らかに異なる新しい日系人像をアピールする表象であるともいえるだろう。

収容所のアルバムが、勉学に励み、スポーツに興じ、アメリカ的民主主義を謳歌する二世像を描いているのは、日系人たちが逆境にも負けず、奪われた「正常な」青春をこのメディアのなかで取り戻そうとした、という解釈が一方で成り立つ。強制移動がなければ、彼らの多くがアルバムに描かれたような「アメリカの高校生」の生活を満喫したと思われるからだ。しかし、エスニック文化の表象に関しては、アルバムで描かれる高校生活は、収容前と収容後で決定的に違っていた。

（3）学校活動の表象における日本の要素の排除

WRAの方針で、収容所学校では日本語教育、日本語による教科指導が禁じられただけでなく、日本的な課外活動も許されなかった。したがって、ハイスクール・アルバムのなかには、着物や生花など、日本的な祭りや伝統を思わせるような活動は、まったく出てこない。では、収容所では日本的な活動が一切行われていなかったのかというと、実はそうではない。一世たちは、碁や将棋、盆栽などを楽しみ、収容所には演芸会場も作られ、日本的な出し物も盛んに上演されていた。



写真5 相撲大会（WRA 提供）³⁷⁾



写真6 将棋をする一世（WRA 提供）³⁸⁾

ヒラリバー収容所では柔道や相撲も行われ、また、他の収容所の写真などにも、盆踊りに若い二世や子どもたちが着物を着て参加している姿が写っている³⁹⁾。すなわち、収容所学校の生徒たちは、学校の外では、自分も着物を着たり、柔道を習ったりする機会があり、周囲の大人は日本的な余暇をたしなんで時を過ごしていたが、学校での活動を記録したアルバムには、日本の要素が一切見られないのである⁴⁰⁾。

ヒラリバーの卒業アルバムに写っているのは、典型的なアメリカのティーンエイジャーの姿である。ジェローム収容所におけるビューティー・ページェントを分析したマリア・マッカンドリューが指摘するように、敵国人である日本人と「身体的に似ている」という理由で生活を奪われ、虜囚の身に甘んじていた日系の若者にとって、アメリカ人女性の美的理想に近い身体をもつ二世女性を自分たちのイメージの代表とすることは、身体を通じて「人種を薄める」ことでアメリカ社会に受け入れてもらうという生存戦略であった⁴¹⁾。戦前のリトル東京で、着物

を着て東洋的な美しさを強調した二世女性が二つの文化の架橋としてその身体を日本人街の経済的活性化に役立てたのとは対照的に、戦中の日系人は、入所者向けの娯楽である盆踊りでは着物を着ていたにも関わらず、外に対しては日本的美のイメージは完全に排除し、二世女性の「アメリカ的美（白人的美しさ）」をことさらに表象の前面に押し出した⁴²⁾。WRAの記録写真には、アメリカのイメージで描かれる二世だけでなく、一世が中心に行った日本の活動も記録されている。また、他人に見せることを想定しなかった個人のスナップ写真では、着物を着た二世の姿も写っているのに対し、高校卒業アルバムから日本的な活動が一切排除されているということは、アルバムが入所者のための情報源や入所者自身の記憶の媒体であっただけでなく、収容所外へ日系人のイメージを発信するためのメディアでもあったことを示唆している。

2. 1944年の卒業アルバム

(1) イラストに描かれる二世のイメージ

1944年のアルバムには、前年度以上に、生徒が作った詩や生徒の描いたイラストが多く載っている。この章では、イラストや詩の中に描かれる二世像や二世の心情について分析しよう。

WRAの基本的な方針は、収容所のなかの日系人からアメリカに忠誠な人間と不忠誠な人間を峻別し、前者をなるべく早く収容所から出して、通常の社会に再統合することであった。再統合は、特に若い二世を早く出所させ、勉強や就職のために中西部や東部に再定住させることで、二世がエスニック集団への帰属を薄めて、「普通のアメリカ人」になることを目標の一つとしていた。一方、軍における人種隔離を徐々に解消しようとしていた陸軍は、敵性外国人に分類することで兵役不可としていた日系二世を兵役可とし、43年には志願兵を募集し、44年には徴兵制を導入した。

これらの目的を実行に移すために政府が43年に実施したのが「忠誠質問」である。「忠誠質問」は単に日系人に、アメリカ軍への志願の意志と日本の天皇への忠誠放棄を迫っただけでなく、もしもアメリカに100%の忠誠を誓えないとすればツールレイク隔離収容所へ再移住させられることを意味した。出生地や国籍、使用言語、宗教、日本へ行った経験の有無など、さまざまな角度から日系人のアメリカへの忠誠度を測ったこの質問は、ときに家族を分断し、コミュニティのなかに猜疑心を産み、入所者と管理当局との間にも大きな不満とわだかまりを呼んだ。

ヒラリバーでは忠誠質問にNoと答えた被収容者は1割を下回り、表立った騒動は起こらなかった。しかし、年度ごとのハイスクールの生徒数の変化を見ると、収容所学校の「異常さ」の一端を見ることが出来る。1942年の開校当時1,893名だった生徒数は、43年7月には1,685名となった。43年秋の開講時は1,469名であったが、忠誠質問と再隔離を経て、年度末には1,256名になった。ジェローム収容所から移されてきた人々が加わった44年秋には1,358名となったが、45年の年度末には1,166名であった⁴³⁾。生徒たちの行き先はツールレイクだけでなく、むしろ多くの生徒は学業や就職のために東部や中西部へと移っていった。1943年からは二世の兵役志願が、44年からは二世の徴兵も始まったため、ますます多くの生徒が学校を去っていった。

卒業アルバムはそのようななかほとんど作りを変えておらず、できるだけ「正常な」アメリカのティーンエイジャーの生活表象を行おうとした。その一方、アルバムに表れる理想的な二世のイメージは、出所許可を得て進学あるいは就職し、収容所を去る姿であった。

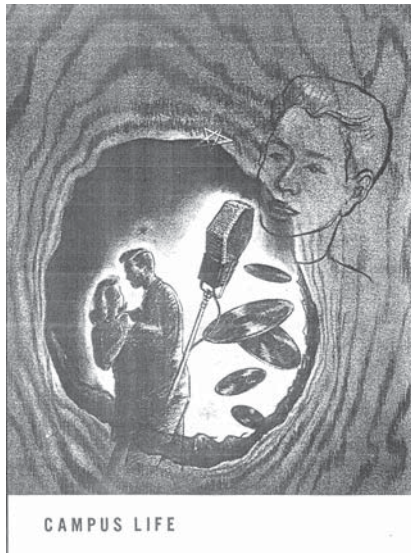


写真7 キャンパス・ライフ

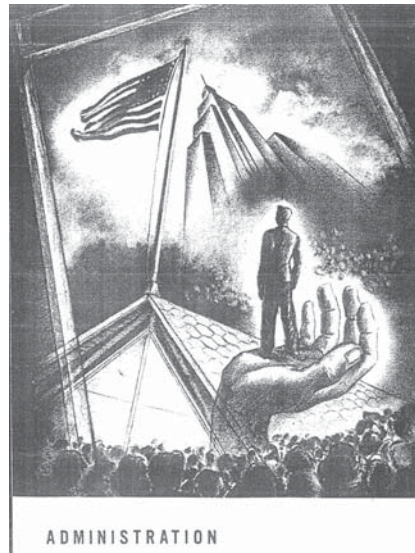


写真8 収容所の外の世界

上の写真は、アルバム内のチャプターの表紙ページに施されたイラストである。左の絵には音楽とダンスに興じる若い男女が描かれ、この時代のアメリカン・ポップカルチャーに見られる典型的若者の姿である。右の絵では、下の方に収容所に残る人々が描かれ、彼らが見上げる先には、バラックの屋根からそびえる星条旗、その彼方にはエンパイヤステートビルのような大都会の高層ビルが描かれている。群衆のなかから、彼らの思いを象徴するような巨大な手が上に向かって伸び、その掌には青年男性が星条旗とビルを見上げてすくと立っている。この若者は、後に残る人々の思いや希望を背負って自由な新天地へと旅立つ。残る人々が思い描き、若者がたどり着こうとする先は、主流アメリカの、しかも大都会である。戦前に暮らしていた西部のエスニック・コミュニティに戻るのではなく、これまでは手の届かなかった主流社会での成功が、二世の目指すべき目的地としてここには明確に示されている⁴⁴⁾。

(2) 詩に表現された二世の苦悩

1944年の『Year's Flight』には、巻頭と巻末の裏表紙に二世の詩が載せられている。雰囲気伝えるために、巻頭のを原文のまま引用しよう。

ONCE, BUTTE HIGH, YOU WERE/ BARREN, DESOLATE, WITHOUT HEART, NOR
SOUL/ LONELY IN YOUR SOLITUE IN THE MELANCHOLY WASTE/ SPRAWLING,
LIFELESS, UNDER TORRID GLARE OF DESERT SUN.../ ALONE, ALWAYS ALONE
TODAY, BUTTE HIGH, YOU ARE/ PULSING, WARM, ALIVE WITH HOPES AND
DREAMS/ THE HEART OF THOSE WHO THRU YOU MARCH ON TO VICTORY/
THROBING IN A PASSIONATE BEAT OF A TRIUMPHANT MARTIAL STRAIN.../ OURS,
ALWAYS OURS
—NOBUKO EMOTO⁴⁵⁾

歴史研究者である筆者には詩の巧拙は判断しかねるが、ヒラリバーにやってきた当初は荒野と感られていた砂漠が、入所者の努力によって暖かい生気を得て、二世がそこから勝利へと力強く歩みだしていく、という作者の気概は読み取れる。巻末の詩にも、外の世界の困難や無知、寄せられる疑念に負けず、パイオニアとして恐れず踏み出せ、というような内容がうたわれている。

詩や短いエッセイのなかには、写真には表れない収容所の異常さや生徒たちの苦悩が、「苦難を乗り越えよう」というメッセージとともに繰り返し表れる。しかしアルバムを見ても収容所の日系人が直面した苦難がどのようなものだったのかはよくわからない。アルバムには生き生きと高校生活を楽しむ生徒たちとそれを支える温厚な白人管理者と支援者の写真やスナップが並び、その他にはPTAや用務員の一世の姿があるのみだ。WRAは入所者にコミュニティ政府を組織させ、民主的な運営をさせることを建前としていたが、収容者が当局に対して不満を表明すると、トラブルメーカーや危険人物として拘束され、場合によっては司法省所管の捕虜収容所に送られた。日系人は権力者に逆らわない限りにおいて、ある程度の自治を認められたのだ。このような状況で、高校卒業アルバムのような半公式的なメディアが、当局の権威主義的な政策を非難するような表象を載せることは不可能である。そこでここでは、アルバムでは表現できなかった生徒たちの苦痛の一例を、戦争が終わって長い時間が経ってから回顧した文のなかに見出してみよう。ケン・タシロがヒラリバーと一緒にハイスクールに通った親友との別れを綴った部分である。

政府のせいで畑や全ての農具を失ったことに父親が非常に腹を立てており、日本に帰りがっている、と彼は涙ながらに説明した。兄姉たちもアメリカは自分たちの権利を奪ったと感じていた。彼らも一緒に日本に帰ることにしたため、ハンクも一緒に行かなければならなかった。かわいそうに、他に選択肢はなかったのだ。家族と一緒にツールレイクに行くよりなかった。10月にハンクと家族が他の人たちと一緒にツールレイク行きの汽車の駅まで行くバスに乗り込むのを僕は見た。ハンクは手紙を書くと約束したが、手紙は一度も来なかった。ハンクは思い出になってしまった⁴⁶⁾。

この回顧録からは、比較的抑制されたトーンのなかにも、当時の生徒たちが政策に翻弄され、親友と引き裂かれた辛さは伝わってくる。しかし、高校生活を大きく揺るがしたであろうこの再隔離政策に関して生徒たちが何を思ったかは、アルバムからはわからない。アルバムで表されるのは、アメリカに対して不満を持たず、あくまで忠誠を貫けば、やがて主流社会にも受け入れられる日もやってこよう、という当局が許容する範囲に収まるメッセージであった。しかし、繰り返し表れる「苦難に耐えて、前を進もう」という自己や仲間を鼓舞する言葉は、かえって彼らの抱えた苦難の深さを表しており、特に忠誠質問とコミュニティの分断の記憶という、語られないがそれを経験した人々には共有される「不在の存在」を隠しているといえるかもしれない⁴⁷⁾。

3. 1945年の卒業アルバム

ここまで見てきた1943年と44年のアルバムからは、戦争と人種差別の産物であった強制立ち退きと収容のなかでも、日系の生徒たちが自分たちの高校生活を「アメリカ的」なもの、そして「正常」に近いものとして描こうとしたことが明らかになった。しかし、45年のアルバムは、戦争が極めて可視化されているという点で、それまでのアルバムとはかなり印象が異なる。

1945年の卒業アルバムに描かれる1944年度のヒラリバーのハイスクールでは、体育館やラボなどの施設も整い、教育環境が格段に充実した。また、大学の紹介、奨学金の世話、受け入れ支援や予測される問題や課題について説明を行うため、再定住先からゲストスピーカーが講演にくるなど、再定住のプロセスが本格化した。一方、『Year's Flight』の冒頭近くには、軍務に就くために学校を去った生徒や教師のリストが載っている。同じアルバムには、二世の息子を軍務へと送り出す一世の葛藤を描いたショートストーリーがある。物語では、当初息子が軍隊に行くことに反対している父親が、砂漠で生き抜き花を咲かせるサボテンの姿に、故国を飛び出して新天地で生き延び、豊かさを享受した自らの姿を重ね、やがて絶望と疑念を振り払って稲妻と雷鳴のなか丘を降りていく⁴⁸⁾。ヒラリバーでは徴兵忌避者は一人も出なかったが、収容所から徴兵されることに入所者が疑問を持たなかったはずはない。アルバムのなかで一世の姿はあまり目立たないが、戦場へと生徒が旅立っていくという局面で、一世と二世のつながりが描かれていることは興味深い。

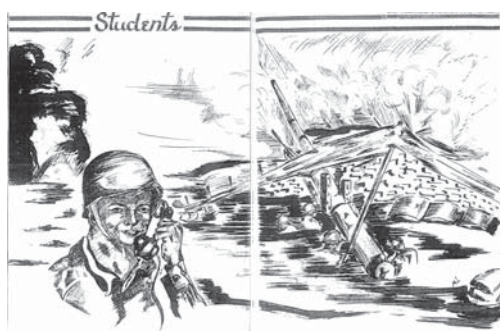


写真9 戦場で活躍する二世兵士



写真10 生々しい戦争の描写

45年のアルバムでより目を引くのは、『The Rivulet』に掲載されているイラストである。出征していく兵士のスナップ写真や兵役についた者のリストだけでなく、この巻には、戦場を直接描いたイラストが載っている。

前年までは、強制移動と収容、忠誠質問と再隔離など、戦争で辛酸をなめた割には、不自然なほど平穏で幸せなハイスクール生活を描いていたヒラリバーの卒業アルバムが、二世兵士に関しては、戦争を前面に出して描くようになったのは、なぜだろうか。一つは、JACLに代表される体制派の二世たちが、自分たちが正真正銘のアメリカ市民として認められるためには、「祖国のために死ぬ自由」がどうしても必要だと考えていたことが挙げられる⁴⁹⁾。マイノリティであるがゆえに、そして敵国に通じる者として市民の範囲から逸脱させられてしまった日系二世は、再びアメリカ市民として統合されるために、ことさら血を流す貢献を強調することで、自

分たちの失ったものを過剰補償したのだ。卒業アルバムでは、「敵」として収容所に入れられたという面からの戦争は描かれなかったが、「アメリカ人」として積極的に国に奉仕する二世の戦中の姿は余すところなく表象されている。ここにもまた、収容所が日系人、とりわけ二世の「アメリカ化」という、一種の社会文化的暴力を徹底する装置であったことが如実に表れており、また卒業アルバムという媒体が、日系生徒を集合的に外の社会に対して紹介すると同時に、自己定義のためのメディアとして、かなり意識的に表象されるべきイメージ、隠蔽されるべきイメージが取捨選択されていたことが示されているのである。

IV 結論

以上、ヒラリーバーのハイスクール卒業アルバムの表象を見ると、「普通のアメリカのティーンエイジャー」としての日常をあくまで描いたのは、「平常」を奪われた二世たちの一種の抵抗であると同時に、主流社会に受け入れられるためのサバイバル戦略であったという解釈が成り立つ。しかしその中で描かれる日常は、エスニックな文化的マーカーを消し、人種的ヒエラルキーを受け入れるものであった。非白人非日系の労働者や親日派など、当局に容認される人種・世代・国籍・行動カテゴリーに当てはまらない要素はすべて省かれ、アルバムは主流社会に対して、後の「モデルマイノリティ」像へとつながるイメージを媒介した。日系人のなかの多様性を自ら消し去る表象は、アルバムを作った生徒たちが、白人教員の指導のもとでそれを作成したという直接的な意味でも、収容所学校においてエスニックな要素を徹底的に取り除くという政策が遂行されていたという間接的な意味からも、政府からの検閲の成果である一方、「ハイフン付きでないアメリカ人」を目指していた日系コミュニティ側からの自主検閲であったとも言えよう。しかし一方で、アルバムに含まれる詩や挿絵などの細部を見ると、矛盾や葛藤、収容生活の異常性なども読みとることができ、アルバムに表現されない記憶と照らし合わせて分析すると、アルバムが実は強制収容のより大きな悲劇を伝えていることが理解できるのである。

注

- 1) 1942年に強制収容された日系人の世代別、性別人口については、Dorothy Swaine Thomas, with the assistance of Charles Kikuchi and James Sakoda, *The Salvage* (Berkeley: University of California Press, 1952) : 18-19 を参照。
- 2) William F. Miller, Gila River Project, Community Management Division, Education Section, "Educational Program, 1942-1945, Final Report," Record Group 210, Records of the War Relocation Authority, *Final Report of the Gila River Relocation Center*, National Archives (Microfilm available at the University of Arizona Library) : 2. 以下、Education Program Final Report と略記。
- 3) 同上, 5.
- 4) 戦時強制収容所における日系人の教育について研究したトマス・ジェイムズは、第二次大戦中のイギリスで疎開児童を調査したアナ・フロイドとドロシー・バーリングガムの著作に見られる戦時下の子どもが直面する危機的状況が、収容された日系アメリカ人児童の情緒的発達に関わる問題と部分的に共通することを指摘している。Thomas James, *Exile Within: The Schooling of Japanese Americans, 1942-1945* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1987) : 5.
- 5) 収容所の学校体系では、小学校卒業後の13歳から18歳の生徒はハイスクールに行くことになってい

た。ハイスクールの生徒は、日本で言えば、中学校と高等学校に当たる学齢であるが、一つの学校に行っているのだから、本稿では「ハイスクール」という用語を使用している。

- 6) 日本語で書かれた収容所新聞、文学に関する主要なもののみ挙げておく。水野剛也『日系アメリカ人強制収容とジャーナリズム—リベラル派雑誌と日本語新聞の第二次世界大戦』（春風社、2005年）、水野剛也『敵国語ジャーナリズム—日米開戦とアメリカの日本語新聞』（春風社、2011年）、小林富久子監修、石原剛ほか編『憑依する過去—アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』（金星堂、2014年）、日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ—移民文学・出版文学・収容所』（新曜社、2014年）。
- 7) 日系人収容所の教育に関する総合的研究としては、前掲したJamesの著作がよく知られている。日本語では合衆国の収容所の教育に関する単著はないが、カナダの収容所についてはフランク・モリツグ著、小川洋、溝上智恵子訳『ロッキーの麓の学校から—第2次大戦中の日系カナダ人収容所の学校教育』（東信堂、2011年）を参照されたい。合衆国の収容所教育の抱えた矛盾については、島田法子『日系アメリカ人の太平洋戦争』（リーベル出版、1995年）などに論じられている。
- 8) 収容初期の主だった騒動としては、1942年11月から12月にかけて起こったボストンのストライキ、およびマンザナー暴動が挙げられる。また、1943年にアメリカ政府が全収容所で実施した「忠誠質問」は、収容者にアメリカ軍への従軍の意志と、日本の天皇への忠誠放棄を迫るものであり、日系人を大混乱に陥れた。不忠誠者を収容するため、ツールレイク転住所は隔離収容所へと転換され、質問に「ノー」と答えた日系人は、それまでの転住所からツールレイクへと、ツールレイクにいて「イエス」と答えた者は、別の転住所へと移送された。ツールレイクでは、ストライキ、暴動、戒厳令と軍隊による騒動鎮圧などが頻発し、親日派による示威行為が繰り返された。さらに、1944年に日系二世に対して行われた徴兵制導入に対しては、各収容所で徴兵忌避者が続出。ハートマウンテン収容所などでは、組織的な徴兵忌避運動が展開された。
- 9) 各日系人収容所の学校新聞および卒業アルバムは、ワシントンDCにあるアメリカ国立公文書館のWRAコレクションに所蔵されており、現物を手にとって見ることができる。“War Relocation Center Yearbooks, 1943-1945,” Record Group 210: Records of the War Relocation Authority, 1941 - 1989, National Archives and Records Administration.
- 10) 合衆国の移民法はアジア出身者に帰化権を認めていなかったため、一世はすべて日本国籍者であった。二世は出生によりアメリカ市民権を持っていたが、なかには日本との二重国籍者も含まれていた。
- 11) ミネ・オークボ画・文、前山隆訳『市民13660号—日系女性画家による戦時強制収容所の記録』（御茶の水書房、1984年）に、集結センターおよび戦時転住所の様子がわかりやすく描かれている。
- 12) James, 27-31. ヨシコ・ウチダ著、波多野和夫訳『荒野に追われた人々—戦時下日系米人家族の記録』（岩波書店、1985年）、156-160頁。大学を卒業したばかりであったウチダも、収容所を出所するまで教師として活動した。ジェームズの著作には、マンザナー収容所でドロシア・ラングが1942年7月1日に撮影した写真が掲載されている。そこではボランティアの二世教師が小学生の学習指導をしているが、子どもたちはバラックの外壁にもたれながら砂の上に直接並んで座っており、教師も地面に跪き、小学生の膝の上のノートを覗き込んでいる。James, 26.
- 13) James, 37.
- 14) 同上。島田は、収容所そのものを日系人のアメリカ社会への統合を目指す教育機関とみなす、いわゆる「モデル・コミュニティ構想」が、日系アメリカ市民協会（Japanese American Citizens League: JAACL）のマイク・マサオカが政府に提言し、WRAに採用されたものであったとしている。
- 15) James, 37.
- 16) 第二次大戦中を通じて、もっとも収容者数が多かったのはツールレイク（ピーク時人口18,789名）であるが、これはツールレイクが隔離収容所に転換され、他の9箇所のキャンプからいわゆる「不忠誠者」が移送されてきた後の数字である。
- 17) たとえば、ツールレイクに収容されたヒロシ・カシワギは、「撃たれるのが恐ろしくてフェンスのそ

- ばには近づかなかった。(中略) 物理的な監禁に加え、私たちの魂もまた、フェンスで包囲されたのだった。この魂の捕囚こそ強制収容の体験のなかでも最も破壊的な部分だった」と証言している。John R. and Reiko Katsuyoshi Ross and the Tule Lake Committee, *Second Kinenhi: Reflections on Tule Lake*, Second Edition (Tule Lake Committee, 2000), 37.
- 18) Education Program Final Report, 13-15.
- 19) 野球場を作ったのは、戦前にカリフォルニアでセミプロ野球選手として活躍したケンイチ・ゼニムラであった。ゼニムラの伝記によれば、キャンプを囲むために運ばれてきた鉄条網フェンスの杭を野球場建設のために流用したとある。Bill Staples, Jr., *Kenichi Zenimura: Japanese American Baseball Pioneer* (Jefferson, North Carolina: McFarland & Company, 2011), 120.
- 20) n.a., *A Year at Gila*, Anniversary Booklet (July 20, 1943), WRA Records, Special Collections, University of Arizona.それぞれの学校の「生徒数」の数字は、教育プログラム最終報告書から転記した。
- 21) Education Program Final Report, 2-3.
- 22) 同上, 4.
- 23) 同上, 11.
- 24) WRAは被収容者の給与を一律に、専門職月19ドル、熟練労働月16ドル、非熟練労働月12ドルと定めていたが、ヒラリバーでは月12ドルで雇われた者はいなかったため、大多数の労働者には月16ドルが支給された。
- 25) 同上, 40.
- 26) 同上, 4.
- 27) Toyoko Toppata, "My Years in School at Gila," in Education Program Final Report, Appendix, 57-58.
- 28) Education Program Final Report, 17.
- 29) 『Year's Flight』と『The Rivulet』は、国立公文書館所蔵の原本の他に、原本を白黒コピーしたものが、アリゾナ州ツーソン市にあるアリゾナ歴史協会に所蔵されている。本稿執筆の段階では、筆者は国立公文書館のアルバムの原本の写真を一部しか手に入れておらず、したがって、本稿で用いるアルバムページの写真のほとんどは、アリゾナ歴史協会所蔵のコピーを用いた。
- 30) アリゾナ歴史協会には1943年のアルバムは『Year's Flight』のコピーのみ所蔵していたので、この章の写真は他に記述がない限り、すべて『Year's Flight』(1943)のものである。
- 31) 和泉真澄『日系アメリカ人強制収容と緊急拘禁法—人種・自由・治安をめぐる記憶と葛藤』(明石書店, 2009年), 71-74頁。
- 32) ターミナル・アイランドの人々は、アメリカに定住した後も社会的・経済的に母村との強固なつながりを保った。今野裕子「トランスパシフィック・ローカリズム—太平洋戦争前の和歌山県太地町とカリフォルニア州・ターミナル島をつないだ故郷の力—」『アメリカ・カナダ研究』29号, 29-57頁。
- 33) 南川文理『「日系アメリカ人」の歴史社会学—エスニシティ・人種・ナショナルリズム』(彩流社, 2007年), Lon Kurashige, *Japanese American Celebration and Conflict: A History of Ethnic Identity and Festival, 1934-1990* (Berkeley: University of California Press, 2002).
- 34) Matthew M. Broines, *Jim and Jap Crow: A Cultural History of 1940s Interracial America* (Princeton: Princeton University Press, 2012): 151-152. キクチの日記には、収容所で働いていたアフリカ系アメリカ人青年が「大多数の二世がアメリカに忠誠を誓っていること知ってがっかりし、『君たちは間違っている。君らを望まない国に対して、何だって忠誠を尽くさなくちゃいけないんだい? (中略)』と応えた」との記述がある。
- 35) 戦前のバンクーバーで活躍した野球チーム「バンクーバー朝日」を分析したShannon Jetteは、朝日が日系人の小さな身体を生かした機敏な動きと頭脳プレー(Brainball)が、日系人に白人と対等に戦い、主流社会からも一定の敬意を受ける要因となったと同時に、日系プレーヤーたちの身体が常に主流メディアから他者化され、その男性性に疑念が表明されたことを指摘している。Shannon Jette, "Little/Big

- Ball: The Vancouver Asahi Baseball Story,” *Sport History Review* 38 (2007) : 5-6, 10-11. 収容所学校の野球チームは、少数の対外試合を除いて、日系人のみからなる環境で活動していたので、プレーヤーの男性性の表象にさほどの不安定さはもたらさなかったと考えられる。
- 36) ちなみに1943年のビュッテ・ハイスクールの生徒会長は、ジム・アラキであった。ジェームズ(ジミー)・アラキは優れたジャズ奏者で、占領軍の一員として来日している間、日本のジャズメンとも交流を深めた。秋尾沙戸子『スウィング・ジャパン—日系米軍兵ジミー・アラキと占領の記憶—』(新潮社, 2012年)。
- 37) 全米日系人博物館の情報サイト「ディスカバー・ニッケイ」には、国立公文書館に所蔵されているWRAが撮影した収容所の記録写真の一部を公開しており、閲覧できる。<<http://www.discovernikkei.org/en/nikkeialbum/albums/103/slide/?page=78>>
- 38) 同上、<<http://www.discovernikkei.org/en/nikkeialbum/albums/103/slide/?page=58>>
- 39) エリック・L・ミューラー編、岡村ひとみ訳『コダクロームフィルムで見るハートマウンテン日系人強制収容所』(紀伊國屋書店, 2014年)。原書は、Eric L. Muller, with photography by Bill Munbo, *Colors of Confinement: Rare Kodachrome Photographs of Japanese American Incarceration in World War II* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2012)。この写真集は、ハートマウンテン収容所でカメラの所有が認められた後、個人として撮影していた写真を集めたものである。戦後も家族や親しい友人以外には写真は見せられなかった。
- 40) 収容所のなかでは、琴や三味線、長唄などが教えられていた。Minako Washida, “Extraordinary Circumstances, Exceptional Practices: Music in Japanese American Concentration Camps,” *Journal of Asian American Studies* 8: 2 (June 2005) : 171-209.
- 41) Malia McAndrew, “Japanese American Beauty Pageants and Minstrel Shows: The Performance of Gender and Race by Nisei Youths during World War II,” *Journal of History of Childhood and Youth* 7: 1 (Winter 2014) : 46, 50-51.
- 42) たとえば、二世女性の美しさを論じるのに、収容所新聞は「大根足」を好ましくない特徴として非難している。McAndrew, 51. 戦前から戦後を通じてロサンゼルスのエスニックな祭典「二世ウィーク」をめぐる文化ポリティクスを分析したロン・クラシゲは、戦前の「二世ウィーク」における二世女性の身体表象が、主流社会をエスニックな空間に惹きつけるため、「オリエンタリズム」的美とアメリカに対する忠誠心の二重性を帯びたものであったことを指摘している。ロン・クラシゲ「二文化主義の問題—第二次世界大戦前の日系アメリカ人の祭りとアイデンティティ」佐々木隆監修、和泉真澄・趙無名編著『アメリカ研究の理論と実践—多民族社会における文化のポリティクス』(世界思想社, 2007年), 189-192頁。
- 43) Education Program Final Report, 27. 1944年6月にジェローム収容所が閉鎖したため、約2,000名の被収容者がヒラリバーに移された。
- 44) 収容所から中西部や東部へ移った二世たちのその後の生活は、主流社会との関わりだけではなく、都会での他のエスニック・マイノリティとの重層的な関係のなかで展開されていった。Greg Robinson, *After Camp: Portraits in Midcentury Japanese American Life and Politics* (Berkeley: University of California Press, 2012)。
- 45) 『Year’s Flight』(1944)より。
- 46) Kenneth A. Tashiro, “Wase Time!”: *A Teen’s Memoir of Gila River Internment Camp* (Bloomington: Authorhouse, 2005), 78-79.
- 47) キャロライン・シンプソンは、戦後の冷戦文化のなかで、日系アメリカ人強制収容は語られない過去の決定的な出来事であり、記憶のなかの「不在の存在」として繰り返しイメージが表れると主張している。Caroline Chung Simpson, *An Absent Presence: Japanese Americans in the Postwar American Culture, 1945-1960* (Durham: Duke University Press, 2001)。
- 48) 『Year’s Flight』(1945)より。物語は「Invictus (負けざる者)」と題名がつけられている。
- 49) JACLが陸軍省と協議して二世の従軍を決定したのに対し、収容所ではアメリカ市民としての権利が

認められるまで徴兵には応じないという運動も起こった。E・L・ミューラー著，飯野正子監訳『祖国のために死ぬ自由—徴兵忌避の日系アメリカ人たち』（刀水書房，2004年）。